

わがごとくわれを思はん人もがな

中世フランスから見た王朝の「恋」

WAGAGOTOKU WAREO OMOWAN HITOMOGANA

Love in Heian Japan,
as Seen from Medieval France

Royall TYLER*

Many people in Japan believe that modern, romantic *ai* (love, amour), an import from the West, stands in opposition to the more native *koi*; and they may cite the “courtly love” of medieval France as evidence of just how different *ai* and *koi* are. However, as long as a comparison between the two is limited roughly to the Heian period on the one hand and to the French twelfth century on the other, the difference is not really so clear. In an influential, late twelfth century treatise on courtly love written in Latin by Andreas Capellanus, *amor* designates a range of erotic play that is explicitly disassociated even from marriage and has nothing whatever to do with “divine love,” “spiritual love,” “fraternal love,” etc. In short, despite obvious differences in the style with which the game is played, the *amor* of Andreas Capellanus is *koi*.

*ロイヤル・タイラー オーストラリア国立大学教授、国文学研究資料館客員教授。コロンビア大学でPh.D. 取得。オハイオ州立大学、ウィスコンシン・マジソン大学、オスロー大学で教員を勤めた後現職。専門は日本文学、近年は『源氏物語』の英訳に取り組んでいる。

Various examples drawn from Heian literature, from Andreas Capellanus and from the poetry of the Provençal troubadours show that the love literatures of these two countries treat many similar themes, including longing, dreaming of the beloved, loss of heart or spirit to the beloved, wasting away, and the ultimate possibility of death. However, the troubadours belonged to a warrior society, whereas the Heian poets and writers knew nothing of martial valor or war. The early literature of "courtly love" suggests attitudes far more complicated than the simple "adoration of women" sometimes attributed to the troubadours. In fact, it seems sometimes to celebrate male prowess, and certain works suggest the possibility of violence against women. This violence becomes a reality in some songs of the genre known as a *pastourelle*.

The tale typically told by a *pastourelle*, that of the encounter between a traveling knight and a shepherdess, resembles that told by certain Japanese stories about the encounter between a traveling gentleman from the capital and a woman of the shore. However, the outcome in Japan is quite different from the one in most *pastourelles*. While the knight treats the shepherdess as a simple object of pleasure and rapes her if he can, the gentleman from the capital discovers, thanks to poetry, the woman's true human worth; he learns to respect her and may even marry her, which in a *pastourelle* would be unthinkable. This difference illustrates a difference between Heian Japanese society and medieval French society that was obvious enough already, but in so doing it makes Heian society appear more thoroughly civilized, at least in its ideals, than its French counterpart. This effect is intended as a

tribute to the quality if Heian literature and of the civilization that produced it.

「あさきゆめみし」という「源氏物語」の漫画版の冒頭の絵には、王朝めいた服装をしている若者がなよなよとした美人の姿を見つめています。若者は無論光源氏で、美人は彼の母の桐壺の更衣です。子供の時に母を失った源氏は彼女のイメージを想像の目で見、「愛だけによって生き、その生命を断ったのもまた愛であった」と彼女の噂を思い出しています。そしてかれ自身もこれから、「愛」に身を捧げようと考えているようです。

この「愛」について紫式部はどう考えたのでしょうか。現代の「愛」を知らなかった彼女は、ヘンに思ったでしょう。あるいは、ヘンだというよりも、いやだと考えたかも知れません。平安時代には、「愛」というのが一生の理想になるべきものではありませんでした。紫式部が想像した桐壺の更衣が「愛」だけによって生きたのではないでしょう。むしろ、彼女が帝に無理に「愛」をおしつけられて、その「愛」がお二人の恥となり、ようやく彼女はそれで死んでしまいました。そこに何の美しい理想がありましたでしょうか。

昔の日本人は知らなかったこの現代風の「愛」は一体どこから日本に入ってきたのでしょうか。ご承知のように、外国からです。「あなたを愛しています」という表現が日本語になってしまったのは、外国語の“I love you”, “Je t’aime”, “Ich liebe dich” などの直訳だからです。「源氏物語」の原文になれている私にも外来の表現であることがわかります。また、男女関係の世界をはなれても、「愛」という語が奇妙に響く時もあります。「兄弟愛」, 「精神愛」などという用語は本来日本語でないことがあきらかです。ですから、たとえば中西進氏は、「愛」を避けて、そのかわりに古典によく見られる「恋」を使った方が日本語らしく、そして日本人の本来の精神らしいと主張されたこともあります。

実は、昔は現代のローマンチックな意味での「愛」は西洋にもしられていな

かったのです。「恋愛？それは十二世紀の発明だ」というが、フランスの歴史家のCharles Seignebosの有名な言葉ですが、イギリスのC S Lewis、そして日本の新倉俊一のような学者も同じことを書いています。紫式部だけでなく、アリストテレス、ウェルギリウス、amorを歌ったオヴィディウスでさえ、この「愛」を知らなかったのです。しかし「恋」といえば、別な話になります。「源氏物語」が「恋」の物語であれば、オヴィディウスが歌ったamorもまさに「恋」でしょう。そして結局のところ、いくら恋愛は十二世紀の発明だといっても、十二世紀のフランスの文学に見られるのも「恋」ですから、私の今日のテーマはやはり、中世フランスの「恋」から見た王朝の「恋」だといっていいでしょう。

まず、ある十二世紀フランスのamorの定義を考えましょう。De arte honeste amandi, 「宮廷風恋愛の技術」、という恋愛の論説書がフランスの宮廷に仕えた聖職者のアンドレアス・カペラヌスの手によるので、原文のラテン語でも口語訳でも広く読まれた、影響の大きい作品です。その冒頭にアンドレアス・カペラヌスがamorの意味を、野島秀勝氏の日本語訳で次のように説明しています。

恋は異性の美しさを目にして、それについて過度に思うことから生まれる一種生得の苦悩である。その苦悩のままに、恋するものは互いに何よりも相手の抱擁を望み、共通した欲望によって互いの抱擁のなかで愛の掟すべてを実践したいと切願する。

ここで論じられているamorは完全にエロチックな意味合いしか持たないもので、宗教的な、思想的な、倫理的な愛などからは縁遠いものです。

しかし、少なくとも夫婦愛は如何でしょうか。「共通した欲望によって互いの抱擁のなかで愛の掟すべてを実践した」カップルがそれから結婚すればどうなるでしょうか。男は女に対して、以前とかわらないamorを感じていくのではありませんか。アンドレアス・カペラヌスのこの質問に対する答えはビックリするほど明確です。要するに、結婚している夫婦の間にamorはありえない

といいます。なぜならば、妻と夫との関係は平等ではないので、妻の方は性交を断ることは出来ないからです。夫の方はproelatio、つまり支配権を握っていて、妻の役割はsubjectio、つまり服従に過ぎないので、二人のあいだのamorは不可能です。ですから、彼らの理想的な関係はdilectio、つまり好意、それともamicitia、つまり友情です。これらの用語には色めいた色彩は微塵もありません。

従って、フランスの歴史家のGeorges Dubyが指摘されたように、この意味でのamorまたは「恋」というのは、結婚の具体的な事実とは遠くかけ離れた、一種の遊技とか社交のゲームを促す力です。恋をする人はいくら真剣であっても、恋のやりとりは戯れの世界に属するものです。光源氏の夜毎の「しのびありき」ももちろんそうです。また、若いころの源氏の「しのびありき」はamorの戯れであれば、彼は正妻の葵に対して感じたのはdilectio、すなわち「好意」ではなかったのでしょうか。特にエロチックである「和泉式部日記」の場合には、和泉式部が敦道親王のお邸に移ってから日記が急に終わることも、なるほど、「宮廷風恋愛の技術」の一つの、いわゆる恋の「法則」に相当するのです。アンドレアス・カペラヌスが「嫉妬心ナキ者は恋スル事能ワズ」と書きました。「和泉式部日記」に見られる敦道親王は確かに嫉妬心のはげしい人で、嫉妬のきっかけがなくなってから、彼の和泉式部に対する態度が段々と「好意」や「友情」の方へと変わっていったでしょう。

私の今日の講演の主題になっている、凡河内躬恒の歌の上の句は、「恋」の夢を代表するものでしょう。「わがごとくわれを思はん人もがなさてもや憂きと世をこころみん」と躬恒が詠みました。彼が「人を思ふ」ことが苦悩を招くのだと聞いてはいますが、自分が「思つて」いるほど自分を「思つて」くれる女性と契ることが出来たら、どんなに幸せだろうと長く想像した上で、そういう噂を信じきれないで、自分でためしてみたいです。これは早くも日本の九世紀に、ある歌人が男と女が、少なくとも「恋」の世界には平等であるべきだと夢見た一例です。

フランスの場合は、同じ理想が十二世紀になって初めて、はっきりしたかたちで現れてきます。Marie de Franceという、フランスの最初の女流作家の、韻文で綴られた短編の中に、

Bele amie, si est de nus:

我が妹や我等二人かくの如し

Ne vus sanz mei, ne jeo sanz vus

我なくして君もなし、君なくして我もなし

という二行が出ています。この「我」という者は悲劇的な愛の伝説で著名になったトリスタンで「我が妹」というのはいうまでもなく、イズー（ワーグナーのオペラのIsolde）です。この二人がフランスのいわゆる「騎士道愛」の源流に立つのですが、彼らも十二世紀の意味での「恋」の世界を代表するものです。イズーに向かってトリスタンが「我なくしても君もなし、君なくしても我もなし」といって、恋人同士の平等性を主張することが出来たのは、ちょうど彼らが結婚していなかったからです。

真剣な戯れである「恋」の世界を描いた文学は、平安時代の日本にも十二世紀のフランスにも似ているところが実に多いので、そのいくつかを見ていきたいと思います。そして、共通点を見た後、一つの著しく違うところで結論したいと思います。私が引いていくところの例のほとんどは、日本の側でもフランスの側でも、日本の平安時代の時間的な枠内に入るものです。平安時代の時間的な限界を越えれば越えるほど、フランスと日本との比較が段々と意味をうしなってしまうからです。また、フランスの十二世紀の恋の文学とキリスト教とのあいだに直接な関係はないので、宗教に触れないことにしました。実は、当時のフランスの社会は武家社会であったことは、宗教よりも、遙かに影響が強かったのではないかと思います。

さて、恋の領域は日常生活や日常の人間関係を外れたものですから、恋人同士が人目をはばかるのが普通で、彼らの密通が露見すれば大変です。ですから、「世界ニソノ秘密洩ルレバ、恋ハ存続スル事稀ナリ」と、アンドレアス・カペラヌスが恋の「法則」の一つとして記録しました。「古今集」のある歌人が、この「法則」を証明するかのように、「空蟬の世の人言のしげければ忘れぬも

ののかれぬべらなり」、つまり、人の悪口のため、忘れはしないのに逢わないようになった、と嘆いて詠みました。

思い通りに相手に逢えない人がやはり、「思ひ〔火〕」、つまり恋の炎で燃えるのも当たり前でしょう。日本の場合には自分の恋を富士山の尽きせぬ火に例えた歌人が多く、小野小町も有名な「人にあはむ月のなき夜はおもひ起きてむねはしりひに心やけをり」という歌を残しました。フランスにもこういう例が数えきれないほど多いです。ところが、面白いことに、日本の方には男も女も燃えるのに対して、フランスの方は男だけです。和歌によく出てくる海士乙女の燃える恋にあたるものは中世フランスの文学にはないようです。フランスの当時の男性が、女性の恋の経験には興味がなかったからであるかも知れません。

それから、恋をする人が「燃える」だけではなくて、切に相手を慕う結果として、「心」または「魂」が身体を離されてさまようこともあると日本にもフランスにも考えられていたようです。「古今集」のある歌が示すように、肉体を遊離した「心」・「魂」が相手の単なる「かげ」になることもあり、フランスにも女に心を捧げてしまった、あるいは女にまるで心をとられてしまった嘆きを詠んだ男性の詩人が多いです。そして、心を失って身体も力を失うこともあります。たとえば「古今集」に「恋すればわが身はかげになりけりさりとて人にそはぬものゆゑ」という歌があって、フランス人もそうでした。「宮廷風恋愛の技術」は恋の法則として、「恋ノ思イニ悩ム者ハ寢食共ニ減ジ細マルモノナリ」と断定します。

そして最後に、恋にさんざん責められている者は死ぬかも知れません。フランスなら、相手の女が「慈悲」をもって助けてくれないと自分は死ぬと訴える詩人が多く、日本にも、「恋ひ死ぬ」という表現を、本気でない場合もあるにせよ、使う歌人もいました。その一人が「古今集」の歌に「恋ひ死ぬとするわざならしむばたまの夜はすがらに夢に見えつつ」と詠んで、「恋ひ死ぬというのか、夜もすがら私の夢に現われてくる君」と、相手のつれなさを面白く嘆いたのです。

「夢に見えつつ」——これで夢の逢瀬というモチーフが現われてきます。これも、切なる思慕によって、心または魂が身体を遊離してしまう結果の一つであるでしょう。日本の恋の文学の場合にはこれがさまざまな形をとるものですが、特に知られている例は小野小町の「おもひつつ寝ればや人の見えつらむ夢と知りせば覚めざらましを」という歌でしょう。これは、小町が夢の世界と現の世界とを重ね、夢の逢瀬にも充実した現実性があったと主張して、相手の男も自分から進んでではなく、小町自身に呼ばれてきたのだと誇って詠んだものです。フランスにもこの歌に相当する歌謡があります。その一つは十二世紀のトルバドールであるArnaut de Mareuilの作品で、彼はこういうふうに書きました。（原文はプロヴァンサル語ですから、私の下手な日本語翻訳で引用するほかに仕方ありません。御了承下さい。）

<i>Adoncs s'en vai mos esperitz</i>	それで私の魂が真っ直ぐに、必至に
<i>Tot dreitamen, domna, vas vos</i>	逢いたいと思う君の方へ飛んで行く…。
<i>De cui vezer es cobeitos...</i>	私のこの夢が続いているあいだは
<i>Ab que dures aissi mos soms</i>	帝王にも伯爵にもなりたい意志はない。
<i>No volri'esser reis ni coms.</i>	むしろ、起きていて君を切に希うよりも、
<i>Mai volria jauzens dormir</i>	睡眠しながら喜びを味わいたい。
<i>Que velhan deziran languir.</i>	

と。小町のように、Arnaut de Mareuilも夢の逢瀬が現実には劣らないと威張っただけでなく、男である彼も、夢にでも女が男を訪れるのではなく、男の方が女を求めていくと見ました。ただ、男である上に、騎士である彼は、恋の夢を見ない可能性を認めませんでした。新倉俊一氏が指摘されたように、普段「吟遊詩人」と日本語で呼ばれるトルバドールは実際には放浪者ではなくて、そのほとんどが身分のある騎士でしたので、武士の誇りや自慢がその歌謡の中にも察せられるのです。しかし、夢の逢瀬がテーマとなる和歌には、夢のはかなさ、そしてそのはかなさから生じてくる悲しさに重点がおかれている作品が多いでしょう。あるいはまた、ある「古今集」の歌人が、「夢のうちに逢ひ見むこと

をたのみつつ暮らせる宵は寝むかたもなし」と詠んで、夢の中にでも逢おう、逢おうとあせって、ちっとも眠れないで失敗してしまったと嘆いた例もあります。これほど人間の実験の経験に添った作品はトルバドールの歌謡の中に少ないです。また、女の方の誇りや自慢を現した歌謡も少ないのではないかと思います。日本の和泉式部のような女性はどこにも見られないのです。「後拾遺集」に彼女のつぎの歌があります。「おほめくな誰ともなくてよひよひに夢にみえけむ我ぞその人。」「疑ってはならない、毎夜あなたの夢のなかに見えてくる、誰なのかわからない女はほかならぬ私よ」という調子の歌をフランスの騎士が女性からもらったならば、どういうふうに答えたのでしょうか。

ところで、夢の逢瀬を中心において、現実の逢瀬も忘れてはなりません。特に文学の対象となるのが^{あかつき}暁の別れです。清少納言のこれについての感想は特に知られていますが、少しでも小学館の日本古典文学全集の口語訳で引用してみます。

人は、やはり暁の別れのありさまこそが、風流であるはずのことなのだ。分別を越えてしほりしほり起きにくそうにしている男を、無理にすすめてその気になるようにし向けて、「とうに夜明けが過ぎてしまいました。ああみっともないこと」などと女に言われて、男がため息をつく様子も、なるほど満ち足りない気持ちで、ほんとうにつらいのであろうよと感じられる……

と、清少納言が書きました。トルバドールも、暁の別れのありさま風流でなければならぬと意識していて、別れのありさまを想像した、特別な歌謡のジャンルまで発明しました。これを“alba”、つまり「夜明け」といいます。空が白んでいくのに強いられて、間もなく帰らなければならない男が、トルバドールのGaucelm Faiditの“alba”の調子で話してくれれば、清少納言もきっと喜ぶでしょう。

Us cavaliers si jazia

ある騎士はこの上もなく

Ab la re que plus volia;

慕っている人のそばに寝ていて、

<i>Soven baizan li dizia:</i>	彼女を何度も接吻しながらこういった。
<i>Doussa res,iieu que farai?</i>	我が心の友よ、どうしよう。
<i>Que.l jorns ve e la nueytz vai.</i>	昼間が迫っており、夜は去っていく。
<i>Ay!</i>	ああ!
<i>Qu'ieu aug que li gaita cria:</i>	起きよ、と夜番が呼んでいるのを聞く。
<i>Via!</i>	立ち去れ!
<i>Sus! qu'ieu vey lo jorn venir</i>	夜明けの後を追って
<i>Après!alba.</i>	昼間がやってくるのを見るのだ。

.....

.....

<i>Doussa res,que qu'om vos dia,</i>	我が心の友よ、世間の人は何をいっても、
<i>No cre que tals dolors sia</i>	妹背を切り離す苦悩より耐えられない
<i>Cum qui part amic d'amia,</i>	苦悩があると信じてはならない。
<i>Qu'ieu per me mezeys o sai.</i>	それをこの私が体験している。
<i>Aylas! quan pouca nueyt fai!</i>	夜は早く立ち去るのだ。
<i>Ay!....</i>	ああ!

と嘆きました。ところが、日本にもフランスにも、しかるべきありさまの暁の別れは希だったのでしょう。特にフランスの武家社会の若い男性が女の感情をあまり顧みない場合が多かったと思われます。「アムールから慈悲が生じてくる」という、あるプロヴァンサル語のロマンの言葉があるとはいっても、多くの場合に強調されたのはむしろ、騎士が^gamorの刺激によって身につける勇気です。「善事をなす力は、恋の刺激を受けてでなければ男性にはない」と、アンドレアス・カペラヌスが書きました。そしてこの「善事」（つまり、「良いこと」）というのは慈悲とも思いやりとも「^{みやび}雅」とも全く関係なく、むしろ、いくさの最中^{さなか}での功績をさす用語です。ですから一般において、紀貫之が和歌の奇妙な機能の一つとして唱えた「男女の中をもやはらげ」ることは、トルバドールの歌謡の目的ではなかったようです。

Georges Dubyの分析によれば、その当時のフランスにおける「恋のたわぶ

れ」は何よりも、自制 (la mesure) への教養になるものでしたが、いくら「自制」というのが「雅」の基礎の一部をなすものであるとはいっても、騎士の「自制」は結局、騎士同士の中で活動できることを目的にしていたものであると思われます。

このことは、十二世紀フランスの恋の文学は王朝のそれよりもさまざまな劇的な可能性に富んでいる理由の一つであるかも知れません。その可能性の中に、女に対する男の暴力行為があります。

「蜻蛉日記」の読者は、道綱母に対する藤原兼家の行動をほめないかも知れませんが、彼女は兼家に殴られた話は日記にはありません。しかし、中世フランスの女性なら、恋人または夫に殴られないとは限らないようです。少なくとも、その文学には暴力の雰囲気漂っているところが多いです。たとえば、Comtessa de Dia (Diaの女伯爵) とRaimbaut d'Orange伯爵の例があります。

十二世紀中期に栄えたComtessa de Diaは数少ない女流トルバドールを代表する詩人ですが、惜しいことに、彼女を軽視したり、軽蔑したりする男と恋愛関係にいました。ある歌謡の中にその不幸を次のように歌いました。

<i>A chantar m'er de so qu'eu no volria,</i>	謳いたくないことを私は今歌はしなければならないのだ。
<i>Tant me rancur de lui cui sui amia;</i>	あの人、この上もなく愛しているあの人を
<i>Car eu l'am mais que nuilla ren que sia:</i>	これほど恨んでいるからだ。
<i>Vas lui no.m val merces ni cortezia</i>	私の哀れみも親切さも、
<i>Ni ma beltatz ni mos pertz ni mos sens;</i>	器量もやんごとなさも知恵も彼に少しも効かない。
<i>C'atressi.m sui enganad'e trahia</i>	私が愚鈍で不格好であったかのように
<i>Com degr'esser, s'eu fos dezavinens.</i>	彼にだまされ、彼に裏切られもしているのだ。

中世の言い伝えによれば、その男はRaimbaut d'Orangeという、トルバドールを兼ねた身分の高い騎士でした。そして、このRaimbaut d'Orangeには、女に求愛を受け入れてもらえない悩みを歌った歌謡があります。その始めに、断られても、相手の女をいつまでも「やさしく、親切に、忠実に」大事にする

ことをRaimbautが誓ったのですが、やがて想像上の男性の聞き手に次のような忠告を与えました。

<i>Si voletz domnas gazaïgnar,</i>	女が自分を大事してくれるのが当然だと思った時に、
<i>Quan crezetz que-us fassan honors</i>	彼女に受け入れてもらいたい意志があったら
<i>Si-us fan avol respos avar,</i>	殺風景な返事しかしてくれないことがあったならば、
<i>Vos las pones a menassar:</i>	彼女を脅 ^{おど} してみせるのが妥当だ。
<i>E si vos fan respos pejors,</i>	さて、それでも生意気な答えをするのなら、
<i>Das lor del punh per mes las nars....</i>	その鼻面を拳でぐっと殴ってやるがいい。

と。冗談にでも、抵抗を見せる女の鼻面を拳で殴るようにすすめるところは王朝文学の一体どこにありましょうか。平安朝の一体どの作者か歌人が同じ作品のなかで、女を「やさしく、親切に、忠実に」大事にすることを決心してから急にかわって、女に対して暴力に訴えるようにすすめたのでしょうか。「源氏物語」には光源氏が女に対してビックリするほど積極的に行動する場面もありますが、これほどのことはまず考えられないでしょう。Raimbaut d'Orangeと比べては、「今昔物語集」の説話に出てくる、染殿の妃を犯した鬼は、かなり愛想のいい奴ではありませんでしたか。少なくとも、妃自身がその鬼を嫌う景色を見せなかったのです。

王朝の恋の文学は十二世紀フランスのそれよりも上品であることは、pastourelleを見てもすぐわかります。Pastourelleというのは中世フランスの歌謡のジャンルで、今のフランスの南部に起こり、間もなくフランスの北部やヨーロッパの各地にも大変な人気を持つようになりました。Pastourelleという名はpastoure、つまり「羊飼いの乙女」から来るもので、pastourelleとはやはり「羊飼いの乙女の歌」というほどの意味です。すべてのpastourelleは、羊飼いの若い女性と通り掛かりの騎士との出会いから始まるもので、語り手は騎士自身です。

現存するpastourellesの最古の例はトルバドールのMarchabruの手によるもので、次の言葉で始まります。

L'autrier jost' una sebissa

先日、生垣のほとりで

Trobei pastora mestissa,

美人で、器量も活気も溢れている

De joi e de sen massissa.

羊飼いの乙女に出会った。

E fon filha de vilana...

彼女はある賤しづの女めの娘で...

と。こういうふうには、旅行中の騎士である「私」が草原を仕切る生垣いけがきのほとりで美人の羊飼いの乙女に出会います。あるいは作品によってその場所が「森と野原との境目」になる場合もあります。

さて、日本にも類似の説話があります。ある貴族の男性が田舎に下って、そこで、美人に出会います。日本には羊も羊飼いの乙女もいないのですが、京みやこを離れた男はどこかの海辺に出ることが殆ど決まっていますので、そこで目にするのがやはり海士乙女です。早くも「万葉集」にこのシナリオが見られますが、その典型的な例は平安初期の歌人の在原行平を主人公とする、鎌倉時代の「撰集抄」に収められている説話です。それが次のように始まります。

むかし、行平の中納言という人がいました。あやまちを犯すことがあって、須磨の浦にながされて、藻塩たれつつ浦づたいなどしているうちに、絵島の浦でもぐりをしている海士の中に、非常に気に入った一人がいました...

と。この出会いの舞台となっている絵島の浦であろうと、フランスの「生垣のほとり」や「森と野原との境目」であろうと、注目の女が陸地でもなく海でもなく、森でもなく野原でもない、どっちつかずの特別な場に現われて、旅人から見れば自分のものにしても差しつかえあるまいように見える存在です。

そして、一度女に目をひかれた旅人が彼女に話しかけます。フランスなら、彼はいわゆる「騎士道愛」の、高貴な女性を対象とする上品な amor の裏面を段々と示していくのです。要するに、美人の羊飼いの乙女を目にした騎士はまるで恥知らずです。騎士道愛の歌謡の作者と pastourelle の作者は同じ人間である場合が多いことが特に注意に値します。

では、羊飼いの乙女に声をかけてから騎士は何をするでしょう。Marcabru

のpastourelleの場合には彼は何回も「さあ、二人で恋の楽しみを味わってみよう」とすすめながら、次の言葉までこぼしてしまいます。

E seria.us ben doblada

君の美しさは今の倍になる、

Si.m vezi' una vegada

もしいつか俺が上にいて、

Sobeira e vos sotrana.

君が俺の下にいたならば……

と。乙女が彼の攻撃を見事に反発した上では、最終的に彼は何もしないで場を去っていきます。ところが、ほかのpastourellesにはそう簡単には行きません。作品によって、騎士が乙女を犯すことを憚らないのです。あるいはまた、乙女のボーイ・フレンドの羊飼いとその仲間に見つけられて、さんざん殴られてしまう例もあります。

それで日本のケースに戻りますが、日本ではストーリーが全く違った方向に展開していくのです。旅人は海士乙女を犯そうともしなければ、海士同士の男たちに殴られもしません。行平と海士乙女の説話はこういうふうに終わるので

行平が海女に近寄って、「どこに住んでいる人ですか」と聞いたら、海女もすかさず、「白波の寄するなぎさに世をすごす海人の子なれば宿もさだめず」と詠んで、姿をけした。行平は感動のあまり、涙をせき止めることが出来なかった。

と。それから行平はどうしたのでしょうか。何を想像しても構わないのですが、これほど短いやりとり、これほど上品な感情がpastourelleの材料にはなりません。

面白いことに、身分や教養のある人のあいだに、フランスの羊飼いの乙女も日本の海士乙女もちょうど同じ評判だったのです。両者は、尻の軽い女だと見なされていました。たとえば、鎌倉時代の人々が海士を遊女や白拍子などと同列に並べたという記録が残っています。和歌に見られる海女乙女のイメージを考えると、それは当然でしょう。しかし、文学に見られる騎士が羊飼いの乙女を軽視することと、日本の文学に見られる貴族が海士乙女を重視することとが、

著しい対照をなすのです。

Michel Zink というフランスの学者がpastourelleの意義を論じて、こう書きました。「絶えず同じテーマを繰り返した中世フランスの詩人たちが、絶えず同じイメージを追いかけていたのであろう。そのイメージは、宮廷の人の知らない、感覚的な大自然のままの風景に呼び起こされてくる、単なる快樂の対象としての女のイメージである」と。行平も絵島の「大自然のままの風景」にさまざまな感覚的なイメージを呼び起こされたのでしょうか、彼は最終的に、海士乙女を「単なる快樂の対象」と見なかったようです。

実は、「対象」（つまりobject, objet, モノ）とは、中世フランスの男性の女性に対する態度の関係でよく出てくる言葉です。Georges Dubyによると、身分の高い女性でも、結婚の観点から見てさまざまな物質的な利益を与えるモノに過ぎませんでした。いかなる利益も与えない羊飼いの乙女は一層のこと、快樂をあたえるモノとしか見なされなかったでしょう。そして、仏教の僧侶であったはずの「撰集抄」の著者の目で読んでみたら、キリスト教の聖職者であったアンドレアス・カペラヌスの、羊飼のような女を論じて書いた文章が、ひどいといしかいえません。「農民の恋」という、「宮廷風恋愛の技術」の短い一章にアンドレアスはこう書きました。

何かの偶然で君が農婦の誰かを愛する羽目になったら、さんざん褒めちぎっておいて、いざ格好の場所が見つかったら、有無をいわず求めるものを奪い、力任せに抱いてしまうがよい。というのも、彼女たちの羞^{はにか}みを解く便利な治療法として先ずいささか強硬な手を使わなければ、その頑^{かたくな}な装いを和らげることは出来ず、彼女たちが温和^{やさ}しく自分を抱かせることも、君の望む慰めを許すこともないだろうからである。

中世フランスの恋の文学の軸をなすものは女性崇拜だと一般に考えられているようですが、現在のフランスの学者の主張によれば、より深いレベルを流れているのはむしろ逆に、女に対する嫌悪の念です。「宮廷風恋愛の技術」の第三巻にその嫌悪の念がはっきりした形で現われてきます。その冒頭に、アンド

レアス・カペラヌスがそこまでamorをほめてきた調子をかえて、女に手を出さない方がいいと強く警告します。なぜなら、「多くの害悪が恋から生まれるが、如何なる善も恋からは生まれえないということだ」からです。そして「如何なる善も恋から生まれえない」責任を負うのは女であることなどは、第三巻を読んだ上ではあきらかになります。恋は罪、恋は悪魔の領域で、それが女によって呼び起こされるので、女も同じ悪魔の領域に属するものです。アンドレアスがこういうふうを書いて話を続けます。

君が女に求める相互的愛など、みつかりはしないのだ。女が男を愛したことなど未だ嘗てないことであり、女は恋の相互的絆によって男に自らを結び付ける事など出来ないのである。……女は凡て握り屋であり貪欲な気質の悪徳に汚れており……女は嫉み深く…また鈍食で胃の腑の奴隷で（ある）…

といって、果てしも容赦なく女の悪を読者に押しつけます。これは羊飼だけでなく、女王でも王女でも、全ての女にわたる非難です。要するに、アンドレアス・カペラヌスの目を見た女は実は、人間というよりも畜生です。大事なのは結局のところ、男が要求する、性的な「慰め」だけです。

これで、「撰集抄」の行平を思い出すとさっぱりした感じがします。行平は「白波の」という海士乙女の答えを聞いて、彼女をちゃんとした相手、つまりちゃんとした人間として認めたのです。むろん、「撰集抄」はその後のことには触れないのですが、幸いなことに、無住一円の「沙石集」には類似の説話があって、仮に「撰集抄」の説話の続きと見ても差しつかえはないでしょう。「沙石集」によればある公卿が、石見の国の守になって石見湯で遊んでいるところに、器量のよい海士乙女に出会って、彼女の和歌に感激しました。それで彼女を連れて京に帰って「御台所^{みだいどころ}」にしたら、彼女は多くの「君達」を生んでくれました。これはたいへん目出度いことだと無住一円が書きました。そして彼は最後にただ一言を付け加えました。「人ノ心ヤサシカルベキニコソ」と。人の心はやさしい方がいい。これはどうも、pastourelleの世界から遠いので

はありませんか。

考えてみれば、「須磨」と「明石」の巻の光源氏もほぼ同じことをしました。昔行平も住んでいた須磨の浦に退去した彼はそこから明石の浦に移って、明石の育ちで、源氏の目で、そして彼女自身の目で見たら海士乙女同然の女性に出逢って彼女と契りました。それから娘が生まれ、ようやく中宮になったその娘のおかげで源氏が外戚にもなりました。しかしpastourelleの騎士は羊飼いの乙女に二度と逢いには来ないのです。海士乙女とは違って、羊飼いの乙女は数にならない存在です。

和歌や「源氏物語」などであろうと、トルバドールの歌謡や「宮廷風恋愛の技術」であろうと、文学作品は個人の具体的な行動を知る手掛かりにはなれないのです。pastourelleを読んで、中世フランスには心のやさしい男性がいなかったと判断してはならないと同様に、「源氏物語」などに目を通したことで、王朝の貴族の男性は皆紳士らしく振るまう人間ばかりであったとももちろん判断出来ません。人間は人間ですから、仕方がないでしょう。しかし、私がちらっと見てきた作品によって察せられるのは、その当時の身分のあるフランス人より、王朝の貴族の方が「心のやさしさ」を少なくとも理想として掲げていたことです。私は中世フランスの文学をいくら愛読しても、いくらその美しさと力と鋭さに感心しても、やはり平安文学のそれなりの美しさとは別に、その慎重さや、単なる理想としてでも、平安朝の貴族がpastourelleを書かないで、むしろ相手に対する敬意や思いやりを重視したことに心から感心するのです。